

今年の夏は、長期予報によると冷夏となっています。病気の発生は、気象条件によって大きく左右されます。生育や気象情報を細かくチェックし、早めの対策をとってください。

いもち病

いもち病は、「いもち病菌」の寄生によって、発芽から収穫期まで、イネの生育期間のほぼすべてにおいて発生します。その発病部位によって「苗いもち」、「葉いもち」、「穂首いもち」、「節いもち」などに分けられます。

発生しやすい気象条件としては湿度が高く、気温が低い年に多く発生します。特に夏場に気温が低く、長雨で日照不足になり、水温が上がらず冷たい水が田んぼに入ることにより大発生することがあります。また、窒素肥料の使用過多によってイネが柔らかくなり、いもち病が発生しやすくなります。

山沿いや川沿いなどの気温が低い所は特に注意して見てください。ひし型の斑点が出ていればいもち病です。すでに発生している所もあります。ほ場巡回をして早期発見につとめてください。矢印にあるような斑点（赤い枠にクリーム色や灰色のひし型の斑点）が特徴です。



紋枯病

主な伝染源は、前年に感染したイネで形成された菌核がほ場内の土の中で越冬し、翌年の代かきでほ場に浮き上がり、イネの株元に付くことから、毎年同じほ場で発生しやすいという特徴があります。

発生しやすい条件としては、梅雨時期の気温が高い状態が続くとイネに付着していた菌核が発芽し、葉鞘内へ侵入して病斑を形成します。気温の上昇とともに菌糸による病勢が進みますが、いもち病のように風に乗って病原菌が運ばれることはないため、ほ場全体に急激に蔓延することはありません。発病すると、葉鞘や葉が枯死すると共に倒伏しやすくなることから、収量と品質低下を招きます。

イネの生育が過繁茂になると紋枯病の発生を助長するので、極端な密植や多肥栽培は避けましょう。



稲こうじ病

出穂後しばらくして見られます。籾のみに発生し、穂に黒いダンゴのようなものが付きます。他の病気と比べすぐに確認できるので、分かりやすい病気です。稲こうじ病にかかると減収につながるだけでなく、出荷時の玄米に混入すると、著しく等級が低下するので注意が必要です。



ヤブカラシ

つる性の夏生多年生草本で主に地下部で繁殖し、各所から萌芽する。生育が進むと根は肥大しゴボウ状になる。他の植物に絡みついて繁茂し、枯死させることがある。種子繁殖する場合も地下部で旺盛に広がるため、きわめて防除しにくい。茶園、樹園地、生垣など広い範囲に生育し、樹木の株元に多い。いったんヤブカラシが侵入・定着すると防除が難しく、雑草害を受けやすい。全面的に被覆して大きな被害を及ぼすことがある。

防除のポイント

春～夏にかけて地下部から萌芽したら、その都度新芽を抜き取る。根で繁殖するため、植替えや改植などの際に、細断された根が地中に残らないよう、ていねいに根を取り除く。発生跡地に再生を見たら早めに抜き取るか、耕起や中耕をして生育を抑えるとともに、移行性の茎葉処理剤で防除する。



ヤブカラシ



ヤブカラシ (生育初期)



ヤブカラシ (花)

ヒメジョオン

種子で繁殖する一年草。種子は着地後すぐに発芽し、秋から冬にかけてロゼット状で越冬する。越冬個体は5月下旬から6月にかけて開花するが、春に出芽した個体は9～10月頃開花する。開花、結実期間が長いので、出芽期間も長く、冬期以外はさまざまなサイズの幼植物が存在する。道ばたや法面、畦畔のほか、普通畑、草地にも多く生育する。

防除のポイント

幼植物に対する中耕も有効である。生育が進んだ個体は除草剤で防除するか、刈払いで結実を妨げ、種子の飛散を防止する。秋作物や冬作物では、作付け前に出芽した個体を耕起で防除できる。草地では刈取をくり返して開花を防ぐ。農道、畦畔などで開花結実すると、ほ場内に種子を飛散させるため、結実前に刈払い結実を防ぐ。



ヒメジョオン (開花期)



ヒメジョオン (生育初期)



ヒメジョオン (生育中期)